



宮 城 県
現代俳句協会
NEWS
2022. 6 No.46



コバルトライン

浅川 芳直
(駒草・むじな)

ふと思い立って牡鹿コバルトラインにドライブに出かけた。連載中の河北新報「秀句の泉」(十一月十七日付)で、河東碧梧桐の「君に遇ふ牡鹿の山の眠る下」を取り上げて気になっていた。碧梧桐が紀行集『三千里』で描写する石巻から牡鹿の風光明媚な景色に触れたのであったのである。そう言えば、最後に、そして初めて牡鹿半島に足を踏み入れたのは震災前、俳句にもそれほど熱心でなかった高校一年の頃。学校行事で網地島へ巡検に行ったときだった。

今回は門脇小学校の前を通って石巻港から北上し、藤ヶ崎を通って鮎川、そして女川というルート。ところどころ国道から降りて港に入る。少し高いところには小さな社が古色蒼然として残っている。しかしいざ港に降りると、真新しい堤防や船はあっても人家のない空間が広がる。紛れもない被災地であった。カーナビは時折り、現在地を道ではなく川や海の上と表示し、何やら混乱してしまう。

地形や変はる日本亀鳴けり

西山 睦

震災直後の師の句がふと頭を過る。雄大な自然は確かに今も美しいが、本来そこに住む人々と共につくられてきた風土、風景は、けつて元のままにはそこにはない。碧梧桐の見た風景は、文字通り地形ごと変わってしまったことを実感する。

ドライブを思い立ったのにはもう一つ理由がある。女川の歌人逢坂みずきの『まぶしい海―故郷と、わたしと、東日本大震災―』(本の森)の歌であった。

「奇跡的に全壊でした」と答えたり全壊の上に流出ありて

逢坂みずき

泥に濡れて悪臭を放っていたノートから収録したという震災前の詩、無事だったSDカードに入っていた津波以前の漁港の写真、震災前後の日記、そして震災以後に始めた短歌が収録されている。

風景は常に変わり続けてきた。もしかすると、わたしは昔からそれに気づいていたのではないのか。だから「今感じていることを残したい」なんて思ったのではないのか。／残された詩と写真は、今は失われてしまった故郷・女川町尾浦の風景の中でわたしが育ってきたことを証明するよすがとなっている。当時のわたしにありがとうと言いたい。(同書二五―二五二頁)

災害に関わらず、風景は少しずつ変わってゆく。海の静かな一日であった。

令和4年度 宮城県現代俳句協会総会

今年の総会は、新型コロナウイルスによる感染予防の措置のため、三月二七日に予定していた総会の開催は取りやめ、書面による決議としました。会員数九三名中、葉書による回答数六二名。このうち六一名承認、白紙一名で過半数の承認による決議を得ました。

第一号議案 令和3年度事業報告

- 1 会報発行（宮城県現代俳句協会NEWS）
四四号（七月）座談会「新型コロナウイルス以後の俳句」
四五号（十二月）一句一葉（自句寸感十名）、亘理吟行会
吟行会 令和三年十二月五日
亘理町（伊達成実霊屋、称名寺シイの巨樹、二十名参加）
研修・句会
- 2 新型コロナウイルス感染防止のため中止
定時総会（令和四年三月二七日、東北エレクトロンホール宮城）
- 3 新型コロナウイルス感染防止のため書面決議
第三五回現代俳句東北大会（令和三年九月二五日、盛岡市）
新型コロナウイルス感染防止のため、事前投句のみの開催
令和三年度会計決算・監査報告

第二号議案

下記の通り

第三号議案

- 1 会報発行（宮城県現代俳句協会NEWS）
四六号（六月）総会報告、吟行会、研修会、ITアンケート等
四七号（十二月）現代俳句東北大会、吟行会、句会
吟行会 秋、実施予定
研修・句会
- 2 四月、ネット句会研修 句会（年度内）実施予定
定時総会 令和五年三月、開催予定。
- 3 第三六回現代俳句東北大会
令和四年九月一八日、仙台市にて開催予定
- 4 令和四年度予算案
下記の通り

第四号議案

令和4年度予算案

<収入の部> (単位：円)			
項目	令和3年度 決算額	令和4年度 予算額	備考
前年度繰越金	446,043	417,448	
地区助成金	150,300	151,200	1,800円/年×84名（令和4年2月末現在会員数94名）
総会後句会参加費	0	0	新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止、書面による決議。
吟行会・研修会参加費	0	15,000	1,000円×15名。新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止の可能性あり。
雑収入	0	0	
合計	596,343	583,648	

<支出の部> (単位：円)			
項目	令和3年度 決算額	令和4年度 予算額	備考
総会費	5,300	15,000	新型コロナウイルス感染拡大防止のため開催中止、書面による決議。
会報費	81,337	100,000	年2回発行（令和4年6月、12月）
負担金	0	100,000	東北大会（宮城県）。新型コロナウイルス感染拡大防止のため当日大会開催中止となる可能性あり。
通信費	48,960	50,000	葉書、切手、レターパック、ヤマトメール便など
事務費	15,110	15,000	インク、コピー、封筒、宛名ラベルなど
吟行会・研修会補助費	15,807	16,000	年2回
顕彰費	11,181	10,000	大崎俳句大会、塩竈ジュニア俳句大会
交通費	1,200	3,000	監査、東北大会参加交通費補助（令和4年度は宮城県担当）。
予備費	0	274,648	
次年度繰越金	417,448		
合計	596,343	583,648	

令和3年度収支決算書

<収入の部> (単位：円)			
項目	予算額	決算額	備考
前年度繰越金	446,043	446,043	
地区助成金	167,000	150,300	1,800円/年×83名、900円/年×1名。
総会後句会参加費	0	0	
吟行会・研修会参加費	0	0	
雑収入	0	0	
合計	613,043	596,343	

<支出の部> (単位：円)			
項目	予算額	決算額	備考
総会費	15,000	5,300	新型コロナウイルス感染拡大防止のため開催中止、書面による決議。
会報費	150,000	81,337	年2回発行（令和3年7月、12月）
負担金	10,000	0	東北大会の負担金（東北大会（前年度）は新型コロナウイルス感染拡大防止のため当日大会は開催中止）。
通信費	15,000	48,960	葉書、切手、レターパック、ヤマトメール便
事務費	5,000	15,110	インク、コピー、封筒、宛名ラベルなど
吟行会・研修会補助費	15,000	15,807	居場所行
顕彰費	10,000	11,181	大崎俳句大会、塩竈ジュニア俳句大会
交通費	25,000	1,200	監査、東北大会参加交通費補助（東北大会（前年度）は新型コロナウイルス感染拡大防止のため当日大会は開催中止）。
予備費	368,043	0	
次年度繰越金		417,448	
合計	613,043	596,343	

上記決算書の各項につき監査した結果、その内容は適正と認めます。

令和4年3月5日

監査 丸山みづほ

監査 萬とく子

小関 桂子 (青岬)
マスク外す鏡に二年経ちし顔

コロナ禍の収束が見られない中、始めは鬱陶しいと思ったマスクだったが、すっかり馴染んでしまい化粧もせずに夕べの買い物に出かける始末。マスクを外した目の前の鏡にあらまあと見つめてしまふ吾が顔が。改めて歳を感じると同時に、こんなことではいけないと気を引き締めた瞬間だった。

梅 森 翔 (滝)
合否待つ永き一日揺るる梅

故菅原園也前主宰との縁で入会した「滝」俳句会は、今年一月創刊三十周年を迎えた。会員の皆様の結束力に感謝したい。私の句は、ささやかな生活記録をスナップ写真で切り取ったような作品が多く、詠み手を感動させるような力はない。掲句は離れて住む孫の大学入試の結果発表を待つ爺の心境の句である。季語は、風で揺れる枝垂れ梅で心の動揺を暗示させる効果を狙った。やはり孫俳句は甘いのか。

小村 寿子 (陸)
戦争が居間に来ている蜃気楼

テレビをつければウクライナの悲惨なようすが子どもの目にも飛び込んでくる現在です。原爆をはじめ日本中が戦禍にまみれたことを忘れ去ることはできません。他国を見て、日本も核武装や憲法改正をしようと言うのは間違っていると思います。平和の有り難さ、平和を守る事の意義を今こそ大切に考えたいです。

新藤 綾子 (青岬)
路のたう人を野山に放ちけり

東北の冬は長く、本当に春が待ち遠しく感じられます。特に、外歩き、山菜採りなどの好きな人にとっては、ふきのとうの顔が見え始めるとうきうきしてしまい、「さあ、私達の出番だ」と言わんばかりに野山に飛び出し、ここみ、わらび、たらの芽探しに心と体を開放し始めるのです。

一 句 一 葉

丸山 みづほ (小熊座)
雉子の声また雉子の声名取川

私の散歩コースの一つに家から近い名取川の土手道がある。広瀬川との合流地点で川幅も河川敷も広い。河川敷には畑の他に葎原や竹林や何か潜んでいそうな藪が広がっている。春から初夏にかけて絶え間ない鶯の声に交じり時折雉子の声がある。「ケーン」あれっ!? もう一度聞きたいな。「ケーン」もう一度! 「ケーン」。しばらく立ち止まったままになる。

狩野 康子 (海原)
手話の指秋の光を掬いあげ

仲間の一人が「視聴覚センサー耳サポ」で暮を教えているという。俳句もという事で訪れた。黒板の右は季語。中は七音。左は五音。日常使用の言葉を書き連ね組み合わせて五七五にする仕組み。早速手話のお世話になる。秋の光を受け、大きな身ぶり手ふりと口の形を使い全身で伝えようとする人間の優しさ美しさが身に沁みた一日。

加藤 邪吞 (泉花野)
梅真白空間置いてきぼり

「自句自解」はすべきではないと心得ておる。自由律系句会「花野句会」創立。「層雲」に入会(後に脱会)。現在、「花野句会」世話人。「海程」仙台支部「む」句会在籍。私は「言葉」の意味を利用して、「重層的イメージの世界」、抽象画のような「感じる」―「感じない」の世界のような俳句を目指している。

中鉢 陽子 (小熊座)
天高し汽笛は腹の底までも

山に暮らしていても夜の汽笛は山を登ってくるようだ。小さな町だが列車が走るだけ有難い。人と会わずに語り合い笑い喋ける現代、こんなに便利になつてしまった社会を私は喜んではいない。追いついていけないのである。ガタゴトガタゴトと近づく夜の列車をそして鳴る汽笛。この頃までが背のびした私の精一杯の一生の中で頂点だったのではなかったのかと夜汽車を聞いて思う。

紺野 みつえ (小熊座)
祖母が焼く味噌おにぎりや秋の夕

私の生まれは仙台の長町です。家は市電通りで小さな魚屋をしていました。家の夕食は店を片づけ終わった後なので、夜の七時過ぎ。当然おなかをすかせた私と姉はそれまで待つていられます。そこで祖母がよく味噌おにぎりを七輪で焼いて私達に食べさせてくれました。なつかしく思い出します。

星 節子
翁忌の赤子抱かせてもらいけり

俳句人口が減少しつつある中、三十年程所属していた「俳句饗宴」が閉じられた。自由という開放感の中にも一抹の寂しさがある。片山由美子氏が「俳句は何かに役立てるものではない。だが人が生きていく上で大きな力になってくれることは確かである。確信する。」と俳壇時評(河北新報)に書かれていた。その言葉をかみしめている。

仙 とよえ (俳句人連盟・石の花)
復活祭の炎彩の卵ウクライナ

まさかロシアがウクライナに侵攻しようとは。世界中に衝撃を走らせた。キリストの復活を記念しての復活祭は彩色した卵を教会へ贈呈する。その中に炎色に染めた卵、あたかも戦火のごとく。戦争への怒りか……。

中村 春 (小熊座)
防空壕の髑髏と出会ふ少年の夏

私の生地、沖縄県宜野湾市嘉数の北側の丘は日本軍に要塞化され、戦時中二十三日間に及ぶ激しい攻防戦があった。小学生の頃、薄の間に髑髏を見つけたことが何度もあった。畑から掘り出された髑髏が通学路の傍らによく置かれていたものである。村人は自然洞窟や亀甲墓に避難したが、米軍の毒ガスにより亡くなった人がかなりいるのであった。

ようこそ、現俳へ。

令和3、4年度新会員紹介
(3月現在)

島 松柏 (荒星会)
スケートの転倒一閃刃のひかり
黒海に大波寄れば死の馬刀貝
流氷を揺すり揺すられ海嘯来

俳句は若い時から短歌と共に趣味的に時々詠む程度でした。自覚的に考えて詠むようになったのは、平成六年に宮城教育大教授で芭蕉の研究者の故金沢規雄先生から、仙台市政だよりの「ページのなかのせんだい」に芝不器男について書くことを勧められてからです。その後不器男句の清冽さに惹かれ、不器男句を慕う数人の仲間と俳誌『荒星』を刊行し、今年で二十五年目を迎えています。

高橋 薫 (小熊座)
御結びは荒塩のみや山桜
暮れ泥む瓜の先まで桜酔い
染井吉野桜の散つてホツとする

かつての上司、小熊座主宰高野先生との出会いが俳句の世界を知るきっかけでした。俳句は単純そうに複雑、だから面白い。自分の無知への劣等感以上に語彙を調べる喜び、日本語の奥深さ、季語の豊かさ、五七五にピッタリ整う時の爽快感に嵌まりました。移ろいゆくものを心に留めて今まで見えなかったものを鮮明化し、変化してゆく自分を感じます。俳句を通じて沢山の出会いと発見をしたいと思っています。

【報告】令和四年度研修会「インターネット句会をしてみよう」

令和四年四月十六日（土） 於・仙台市中小企業活性化センター（アエル）

令和二年初頭からの新型コロナウイルス感染拡大により利用が活発になったインターネット句会を実際に体験してみようという研修会が開催された。これに先立ち、ITに関するアンケートを行ったところ、ほとんどの会員が利用したことがないことがわかった。

研修前半は、プロジェクトを使用し、小田島渚氏が講師となり、現代俳句協会のホームページの地区活動やインターネット句会、ズームの利用方法などの紹介があった。次に浅川芳直氏が講師となり、東北若手俳人による「むじな」でのグループクラスルームの活用方法を説明した。続いて本番となる夏雲システムを利用した当季雑詠二句出しのインターネット句会を行った。参加者十名がそれぞれのスマホを使って夏雲システムの清用紙ですぐに選入ることができた。得点結果の開示後は作者名を非開示として合評形式で句会を行った。投句及び清用紙作成、選句に時間がかからないため、二句出しの席題（「桜草」、「上」）も行うことができた。

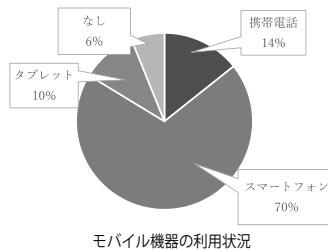
参加者にとっても簡単に使えたと好評であった。渡辺誠一郎会長は、システムの使い方をより多くの方に体験してもらえよう今後も定期的に研修会を開催したいと話した。

（高得点三句）

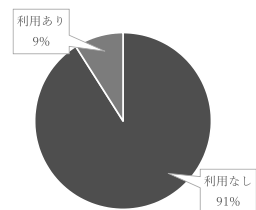
八点 掌の花びらを風の中に戻す
七点 猫の尾の触れてゆきたり桜草
六点 逆光にさくらの血管見たような
蛇上る竹ひとふしの唸りそむ
縄跳の子らの数より影多し
花の雨傘にはみだすランドセル
海境に挙る初蝶二万頭
蠅生る最上階のオフィスカナ
生も死もたつた一文字さくら草
仙台の風吹くところ桜草

奥村 俊哉
庄子 紅子
小村 寿子
浅川 芳直
小田島 渚
小関 桂子
坂下 遊馬
成田 一子
丸山みづほ
渡辺誠一郎

ITに関するアンケート集計結果（会員 93名回答 44名回答率…47.3%）



モバイル機器の利用状況



ネット句会の利用状況

・モバイル機器の利用については、スマートフォンの利用が最も多く、約70%を占めている。

・夏雲システムなどのネット句会の経験者は9%、zoomなどのオンライン会議経験者は約16%で、ほとんどの会員はネット句会を利用していない。

■ご案内
「インターネット句会をしてみよう」研修会の次回は八月を予定しています。参加ご希望の方は miyagikengh@gmail.com までメール下さい。

■慶祝
令和三年度宮城県芸術選奨新人賞・第六回芝不器男俳句新人賞対馬康子奨励賞

浅川 芳直

■謹悼
佐野 久乃（小銀座）
後藤久尼克（野の会）

令和四年二月二七日逝去
令和四年四月二九日逝去
享年七十一歳
享年八十六歳



成田一子『トマトの花』（朔出版）

あざやかな生

小田島 渚
（銀漢・小熊座）

成田一子氏をはじめとお見かけしたのは、平成二八年四月開催の第四六回宮城県俳句大会の席であった。急逝された父菅原閑也氏を継がれ、滝俳句会の副主宰となられたご挨拶をされた。当日の席題「袋」では次の衝撃的な一句で宮城県俳句賞を受賞、会場を沸かせた。

蛇穴を出づグラビアは袋とち

平成二九年に主宰となられ満を持しての第一句集は、鮮やかな赤に金色のトマトが散りばめられた現代的な美しい装丁。

未婚なり野葡萄に両指を染め

集中最も惹かれた一句。神話的な若々しい肉体の野趣ある華やかさを表現することに成功しているのは蛇穴の句同様の取合せの妙にある。

成田は、ブログ（成田一子俳句のページ「ポエジ」のありどころ）『二物衝撃』と『写生』（一）において、取合せをコントラストとグラデーションに分け、いずれも作者の構成意思が働いているのに対し、その意思が希薄に感じられる取合せを二物衝撃と分類し、その意思の希薄さは写生句にも通じると言う。そして「全く関係のないふたつの事柄を繋ぎ合わせる時作者の脳内には、『無意識の必然』が働いているように思えるのです。二物衝撃の句の根底には『かかずにいられない』というデモニッシュな衝動がある。写生句も『ここを切り取らなければ』という衝動がある。それはなぜなのかわからないし、読者にもわからない。しかしその素晴らしい詩的世界に触れた時、私たちの世界を見る目が変容していくことは間違いないと締めくくる。未婚の句はグラデーションの取合せであり、蛇穴の句は二物衝撃の取合せとみていいだろう。成田俳句には取合せの巧みさが随所にみられるだけでなく、蛇穴の句にみられるような潔さのある「無意識の必然」の働きが天性として備わっているように思う。そして詠まねばならないという衝動があり言葉がその熱を失わずに伝わってくる。

楽園を追はれたる日の裸かな

細胞の入れ替はるまで泳ぎけり
灼け砂を来て太陽を口うつし

二句目三句目は冒頭の〈息つぎに太陽を飲む泳ぎかな〉に呼応するように巻末に置かれている。太陽を口移しするその行為から、灼け砂を歩いて来る者は恋人であることが読み取れる。読者は洋画にあるようなドラマティックな展開を楽しむ。主体と相手のロングショットから相手はこちらに近づいて来るショットに切り替わる。そして読者はそこで終わらずに主体となつて、口移しする相手の肩越しに眩しい世界をも見る事ができる。

女性の体感を通じた〈盛塩を崩してゆけりサンドレス〉〈初潮来し日のストープの匂ひかな〉〈姫蜘蛛を風に返して処女を捨つ〉〈子宮でふ宮に人ある淑やかな〉のような佳句も多くみられる。近年ジェンダーに関する問題が俳壇でも取り上げられることが多くなったが問題を意識すればするほどかえってその陥穽に落ちるような息苦しさを感じなくなかった。成田俳句にはその軌が最初から感じられず女性が女性らしくではなく、成田一子が成田一子らしいということにすぎず心地がいい。

成田俳句の世界には生のおざやかさというべきものが息づいている。この生のおざやかさはどこからくるのだろうか。菅原閑也前主宰が『滝』創刊にあたり俳句をやる意義として挙げた五項目の中に「自己肯定感の育成」と「世界観・人生観の確立」がある。前主宰は働き盛りであった五十代に入院されるなど決してただ肯定できることばかりの来し方ではなかったはずである。しかしままならない人生も含めて生を丸ごと肯定しようという強い姿勢を持つことによつて、作品世界の確立を導くことを提唱するものであり、それは現主宰である成田にも引き継がれ、十七音を想いの塊にして生のおざやかさを立ち上げているように思う。

やはらかく嬰の陰拭く花ぐもり

白南風や果物めいて子は眠り

二日はや積木はなばなく崩す

ままごとに修羅場ありけり蝶の屋

かなかなや子供靴より砂無限

握らるる手の小ささよ蜂ぶぶぶ

これらの句はわが子を愛おしむ一個人の想いを超えているだろう。〈ぶらんこのてつぺん吾のみなくなる〉〈遠足を戻りて暗き父母の家〉といった句もある。かつて子供であった自身の声をも聴きとっている作者の瞳には、わが子を通した新しい世界が光り輝いている。この様な世界も今回の句集の魅力の一つであろう。

佐藤みね『稻の香』評

(朔出版)

中村 孝史

(海原)

平成二五年に上梓された第一句集『薫風』からもう少しで十年となる。佐藤みね氏の生活感に溢れた迫力のある作品世界は、昨年の第四六回宮城県俳句賞の選考でもとても記憶に残っていた。第二句集は久しぶりに佳句集に出会ったという思いがする。

どこからか落葉の声や宿の下駄

木の芽山雨の匂いを膨らます

橋二つ渡りて村の余花に逢う

夕焚火みな少年の眼で笑う

夕焚火の匂は、焚火の周りの大人の顔が少年のように輝いていると

いうもので、実に面白い。

稲の香の溢れる道を夜勤明け

夜勤明けで帰ってくる娘さんを詠まれた一句で句集名ともなった。仕事帰りの疲れや充実感を持って帰宅する娘さんを案じながら待っている

母親の優しい姿が見えてくる。

菊人形の魂なくて胸高し

群なしていずれも孤独曼珠沙華

二句とも菊人形や曼珠沙華を季語としてではなく、実体としてとても

深く感受しているからこそ魂も孤独も観念に落ちない秀句となっている。

集中、光を感じる好句が多かった。

納屋奥の鎌ひかりだす雨水かな

代掻に迫りくるなり山の影

大枝の影を映して水澄めり

落葉して山に陽さしの戻りけり

花過ぎの昨日とちがう風の色

次のような句はスケールが大きく氏の特性が存分に生かされてる。

春虹は空の吐息や蹴洗う

山鳩の声に夏霧晴れてゆく

朴の花雲の近づく気配あり

そして、亡くなられた息子さんを詠まれた句は想いが切迫してくる。

小春日や遺品の中のユニホーム

夕星に子の名を付けて門火たく

氏は県北にお住まいで農業に勤しまれている。厳しくも豊穡の自然に

囲まれる日々がスケール感のある鋭敏な感性をより高めるのだらう。

この様に生き生きとした息遣いに満ちている一集である。

亘理吟行記

菊池 修市 (青岬・牧)

新型コロナウイルスの感染の波が繰り返した影響で行えなかった吟行を、小康状態であった令和三年十二月五日に久しぶりに開催することができた。

初冬の曇りがちの天候ではあったが、顔を合わせての句会に皆さん期待を含ませての参加であるように感じられた。当日の参加は、初参加者を含めて二十名。結社も居住地も異なる方との吟行句会に、筆者も期待を持ちつつも緊張して参加させていただいた。

亘理駅に集合した参加者は、協会事務局の坂下遊馬さんの案内で、町内の大雄寺(亘理伊達家菩提寺、山門が町指定文化財)、称名寺(樹齢七百年を超える椎の木が国の天然記念物)、町郷土資料館を巡り、それぞれの地で句作に励んだ。大雄寺では亘理伊達家歴代当主の墓所に往時を偲び、称名寺では椎の木の雄大さに時と自然に対して畏敬の念を抱き、時折触れる初冬の風と降る落葉にも季節の移り変わりを感じながらの吟行であった。

昼食に郷土料理のはらこ飯弁当を頂いた後、午後一時より一人三句投句・五句選句で句会が行われた。最高得点句は星節子さん・小田島渚さん兩名。

小六月白き寝釈迦の鼓動聴く

冬ぬくし巨木の洞に目がひらく

この外の高得点句は以下。

称名寺の石段やさし散紅葉

転げたる殉死の墓石冬紅葉

山茶花や祖先も地震の地に生きて

青空の動かぬ水面蓮の骨

句会では、中村孝史顧問・渡辺誠一郎会長からの講評・感想の他、参加された皆さんからもそれぞれの句の読み取りや感想が述べられ、闊達な意見交流が行われた。参加者の結社・年代を超えての講評や感想は結社での句会と違う味わいがあり、いつもと違う視点からの意見に学ぶことも多く、充実した時間となった。自分自身の感想とはなるが、充実した時間を持って、これから俳句を作る上で大きな刺激を受け、参考となる一日だった。

渡辺誠一郎展

豊かな時間

―書と写真と―

成田 一子
(滝)

二〇二一年十一月九日から二十一日にかけて「渡辺誠一郎展 俳句と写真」が開催された。会場となった塩竈の「ビルドスペース」は気軽にアートが楽しめるあたたかい空間である。句集『赫赫』より、誠一郎氏の揮毫による俳句十四句と『俳句旅枕 みちの奥へ』の写真の展示が中心である。

場内に足を踏み入れると、展示会特有の堅苦しさがなくどこかくつろげる空気が流れている。よく見ると俳句が色紙や短冊などではなく段ボールや菓子箱などを利用して書かれているのだ。素朴なあたたかみと東北人らしい力強さが一層際立っている。

真っ赤な紙に書かれた〈極月の靴を磨いてつつましく〉の一句は季節柄、ちよつと早いクリスマスマスプレゼントのような趣で心惹かれた。

『俳句旅枕』ではモノクロだったのがカラーで大きく引き伸ばした写真の数々も大変魅力的だった。個人的に印象的だったのが津軽の「裳月(ほろつき)集落」の一枚。著書の中でも漫画家つげ義春が出て来そうな風景とあったが、このような場所がまだ日本に存在していることに驚かされると同時に、ここを写真に収めようとした氏の「観光者視線」ではないセンスを感じる。また寒風沢島の牡蠣の共同処理場の一枚も、新鮮な牡蠣の匂いの漂ってきたような強烈なリアル感があった。俳句を詠むという行為は直観に依るところも大きく、そういった意味で「俳句」と

「写真」は通じるものがあるのではないかという気がした。優れた俳人は写真も上手いという確信を持った。

ふだん私たちは文学作品を主に紙に印刷されたもののみ鑑賞するが、こうして書や写真に囲まれると作者の生の息づかい、肉感的なダイナミズムが肌で感じられる。書と写真という視覚情報から作品世界を楽しむ豊かさ



第三六回現代俳句東北大会のご案内

日時 令和四年九月十八日(日) 午後一時
場所 東京エレクトロンホール宮城
記念講演 木山 幸子氏(東北大学准教授)
席題句 出句二句(題)「当日発表」 参加費 千円

編集室から

◆コロナ禍も三年目、俳句大会や句会などの活動も制約が続いています。安全な経口薬の普及が期待されると同時に、今後もウィルスの変異や増殖、新ウィルスの発生が予測され、正にウィズコロナの時代となっていく予感がします。

◆第三六回現代俳句東北大会が六年ぶりに仙台市で開催されます。昨年の岩手大会、一昨年の青森大会はコロナ禍の感染防止対策のため中止となり、応募句のみの大会でした。今年こそは俳句大会が開催され、会員相互の親睦を深めたいと思っています。

◆「ITに関するアンケート」へのご協力有難うございました。集計した結果、ネット句会の経験者は九%でした。ネット句会研修が好評だったため今後も開催予定です。コロナ禍の中、スマホを使って簡単にできるネット句会を楽しんでいただきたいと思います。

◆現代俳句協会ホームページの地区活動のサイトで、宮城県のお報や地区協会長インタビューの動画がアップされています。他の地区とあわせご覧ください。「現代俳句協会」で検索できます。(遊)

○表紙の写真

十一基の山鉾や雀踊りが華やかな仙台青葉まつり。今年三年ぶりに規模を縮小して五月十四、十五日に開催された。

青葉まつりかつての猛者の登音も／渚

発行所 宮城県現代俳句協会

令和四年六月二十日発行

発行人 渡辺誠一郎

編集者 坂下遊馬、小田島渚、浅川芳直

事務局 千九八九―二三五一

宮城県亘理郡亘理町北新町三二―三

坂下遊馬 方

電話〇二三―三四―一七八一